
僕らは、ただ強くありたかった。

蛍光灯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らは、ただ強くありたかった。

【Nコード】

N0883Z

【作者名】

蛍光灯

【あらすじ】

少年は、魔法高校の学生だったが、

親友のせいで世界を変える手伝いをするようになってしまう。

プロローグ（前書き）

この小説は、フィクションです。
実在の人物団体は、存在しません

プロローグ

説明

この世界では、魔法が存在し、国同士が、戦争をしていた。魔法を使える者の中には、潜在的に、強い魔力を持ち英雄の力と記憶を持つ転生者がいた。転生者は、記憶を持っているだけで、性格まで同じではなかった。そして、生まれつき不思議な髪や目をしていた。国は、転生者を守るため護衛を一人一人につけ守らせ国を裏切らないように見張っていた。そして、転生者は、親族以外に、何の英雄の転生か、喋っては、いけなかった。この禁を破ると力を封印され、一生国に監視されることになる。封印は、五年後に、解除される。

どうしてこうなってしまったのだろうか。

僕は、ただ強くなりたかったただけなのに、こんな事になるなら、あの時あの場所で、もっと僕の心が強く

あれば良かったのかもしれない。そうあの時あの場所で別の道を選
択し彼といれば……

夕暮れ時二人の少年が小さな広場のような所で話していた。歳は、
9歳くらいで、一人の少年は、

髪の色は、綺麗な銀色で、目も同じ色で、絶世の美少年のような顔
つきで、やさしそうだった。

もう一人は、髪の色は綺麗な灰色で目も同じ色顔は、まあ美少年に
入る部類で、嬉しそうに笑っていた。

銀色の少年が、急に真剣な顔になり「龍騎りゅうき、俺は、戦争をするこの
世界が嫌いだ、このままだと俺も、俺の家族も、お前や、お前の両
親も死んじまうでも、俺には、それを変える力も守る力も無いだか
ら俺軍に入るよ」

もう一人の少年は、驚いた顔で「で、でも、迅、君だって転生者なんだから力は、あるじゃないか君は、もう充分に強いよ」

迅は、「違うよ龍騎俺だって、まだまだ弱いし守る力は、ないんだ・・・」消え入りそうな声だった

龍騎は、しばらく何もいえなかった、親友の決意がこれほどとはと驚いていた。

迅は、しばらくして背を向け歩いていった

龍騎は、決意したように笑いながら迅に言った「じゃあ、ぼくが、君を守ってあげるよ」

迅は、振り向いて笑顔で「それは、俺を倒してから言えよ」

龍騎は、「今は、無理だよ。だって君に、名前言っちゃったから」

迅は、気まずそうな顔になって「世界が、変わったら教えるよ」と言った

龍騎は、「うん、分かったバイバイ」と笑顔で言った

迅は、「おう、俺が世界を変える本当の英雄になってやるよ」と言った

二人は、この日を境に別々の道があるきだしたそれが、交わる時争うとも知らずに・・・

プロローグ（後書き）

連載は、不定期です。改善点など感想がありましたら教えてください。
否定的なコメントとかやめてください。

第1章 日常

目が覚めて起きると見慣れた自分の部屋いつ見ても無駄に広いこれは、両親と不仲な俺の為に姉さんが買ってくれた

マンションの一室だ、一人用のワンルームでいいと言ったのにまったく・・・俺の名前は、ひすきりゆうき火月龍騎

魔法高校射撃科の二年生だ、「今日もめんどいなー」といいながらも準備する。性格は、自分でも困っているめんどくさい

と思っけていても、困っている奴は、ほっとけないだから、周りからは、男女ともなく慕われてると思う。でも告白とかは、

されたためしがない、結局良い人止まりなのだろう・・・髪は、長髪で顔を隠している。色は、変わらず灰色だ

顔は、一般的に見て上の下くらいだろうか、俺は、あまり気にしないが子どもの頃から変わったのは、体格と、

戦闘の技術と腕に残る刺青のような封印の痕ぐらいたろうか封印の痕は、見られてもうれしいものでもないので腕には、

包帯でぐるぐる巻きにしてある遅刻しそうになつたので急いで学校に向かった校門近くまで行くと、友人の黒川比例くろかわひれいと青沢雄二あおさわゆうじが口喧

嘩をしていた。黒川は、髪と目は、紫で顔は、インテリ系眼鏡のイケメンだ、青沢は、髪と目は、青色で男らしい顔のイケメンだ二人とも俺と同じ転生者だ、しかも家は、大富豪とくれば

成績もいい黒川は、射撃科の第一位青沢も剣術科の第一位だ今学校の女子の人気を二つに分け独占しているどんな完璧超人だこいつら俺に分けるよ・・・おいかんいかん僻みになってしまった俺の成績は、第七位だったりする実力は、

黒川と同じくらいだが、いかんせん筆記がダメダメなのです。つまりは、馬鹿なのだろうとあえず俺は、二人の

喧嘩を止めに入った「まったく論理的じゃないね」「はあ、論理も糞もあるかよバーカ」分かるだろう最初のが、黒川で、

次の青沢だ以下くとあでいこう「何の話でもめてんだ」あ「肉まんをそのまま食べるかちぎって食うかの話だ」

俺は、はつきり言っただけ驚いた。こいつら頭良いのに馬鹿なのだろうか？「どっちでも良いだろうまけりゃ」と俺が言つと

「良くないんだよ龍お前どっち派だ」めんどいなこいつら俺は、普通に食う派だが、そんなこと言ったら黒がいじけるし

青が調子に乗ってうざくなるから俺は、こいつらの喧嘩をほっとく事にした。喧嘩したきゃしてるモテンだから苦しめ

リア充め、おつといかんまた僻んでしまった反省反省「おれは、一口で食う派だ」青と黒は、驚いていた。は、ザマアミヤガレすると黒が、「さすがだな龍あんな大きなものを一口で食うとは、言葉も出ない」青が、「すげーぜ龍」とか

言い始めやがった。いやお前らまず疑えよ信じんなよ、やっぱこいつら馬鹿なんじゃないだろうか・・・

こいつらの頭が心配になつてきたぞすると黒が、ニヤニヤしながら、肉まんをだしてきた

「さあ龍食えまさかさっきの嘘じゃないよな」青もニヤニヤしてやがるこいつらはめやがったな

やっぱ頭良かったぜ・・・俺は、顔を引きつらせて「あ、ああ嘘なわけねーだろみせてやんよ」とか言ってしまった。

俺の馬鹿意地張らないであやまればよかったぜ、くそ食うしかないのか・・・やってやんぜ男龍騎二言は、無しだぜ

俺が、決意を固めたとき黒の姉の木の葉はのさんが、「あー肉まんだけ」と言いながらかつさらっていった

ふーラツキー木の葉さんマジ神だぜーと思いつつも俺のあの決意は、なんだったのかと肩をすくめると

何を勘違いしやがったのか黒が、「そんなに食いたかったのか肉まん？」とか言い青が自信満々に「安心しろこんな事

もあるうかと超特大肉まんを用意していたぜ」とか言いながら普通の三倍くらいの肉まんをだしてきやがった

こいつどんだけ用意周到なんだよ俺を殺したいのかこいつは、あんなに一口で食うとかの前に窒息して死ぬから

やっぱバカなのこいつ、イライラしたので肉まんにグーパーパンチごめん肉まん恨むならこいつを恨んでくれ

丁度チャイムが鳴ったので教室に急いだ青と黒は、悔しそうにしてたが諦めたようで教室に入ってしまった

青は、剣術科なのでクラスが違う。クラスが騒がしかったのでとなりの女子に聞いたところ剣術科に転校生が来たらしい

かなりの美少年だとか俺は、心の中で、ち、リア充かよと僻んだこれ以上俺は、考えると何か大事なものを失う気がしたので考えるのを辞めた……

昼休み黒と一緒に青を探しに行くと青が見知らぬ少年をつれて歩いてきた

そいつは、俺の良く知る人物で軍に入った親友神谷迅かみたにじゅんだった

「久しぶり龍」と笑顔で言った……

第1章 日常（後書き）

文法苦手なのでよろしくお願いします。

日常？（前書き）

文法下手でごめんなさい。

日常？

「龍久しぶり」

なぜだ、なんで迅がこんなところにいる、あいつは、軍に居る筈だ退役したとか

聞いてないぞどういう事だ。驚いた顔をしている俺に青と黒は、「あれ、龍知り合いなの？」とか聞いてきた

何も答えられない俺を尻目に迅が軍人な事を隠しながら説明している。俺は、まだ放心状態だ

いや、人間ほんとに驚くと何も出来ないんだな、いやー勉強になつたと暢気に考えている俺は、やはり馬鹿なのだろう

迅が話終わつたようだ、俺もさすがに立ち直つた俺は、青と黒に「ごめんちよつと迅と二人で話したいから」と言い

青と黒を尻目に迅を連れて屋上に走り去つた。青達は、不満そうだったが、しょうがないだろう。

後でなにかおごれば機嫌も直すだろう現金な奴らだまったく・・・

さつそく迅の馬鹿や郎に聞いたこいつに何か聞くのは、何かやだがしょうがないだろう

「なんでお前がここにいるんだよ、軍に入ったんじゃないのか？」すると迅は、笑いながら「はは、驚いたか？」

とか言つてきた理由聞いてんのに質問で返すな馬鹿やろう殺したるかマジで

「ごめんごめん、そんな怒るな龍。ちゃんと話すから、じつわな元帥が、君もたまには、何か楽しんだらどうだい？」

そつだ高校にいったらどうだい？とか言われてなこつなつたんだよ。嘘じゃないぜ」

「はあく嘘言つてんじゃないやねーぞ？元帥に会えるわけじゃないじゃん、た

しかお前大佐じゃなかったか大佐で元帥にあえねーだろ」すると迅は、笑って「あいかわらず馬鹿だなお前俺の今の階級は、少将だ、最年少だぜ」とか言いやがった

俺は、絶句した少将なんてのは、そんな簡単になれるものじゃない將軍職なのだから当たり前だ

俺は、素直に「すげーな迅お前マジすげーよ」と言っただけで、迅は、真剣な顔で突然

「お前の噂全部調べたけどこの学校では、猫被ってるみたいだな四年前の戦争で、最強を意のままにした

伝説の傭兵のくせになぜ軍に入らないまだ小父さんたちと喧嘩してるのか？いいかげんにしろよ軍の名門の

火月家の次期当主のくせに」となぜか怒っていた。俺が、傭兵として戦ったのは、こいつを

守るために強くなりたかつたからだというのにあの約束の為に・・・

「お前には、関係ない」と弱弱しく言うことしかできなかった迅は、「関係なくない俺は、お前と一緒に

戦いたいなお前には、一番得意な刀を学校で使わない射撃科の七位で甘んじてるじゃないかまだ刀を使っていたら

俺も許せるでも、お前は、本気をだそうとしないそれが、気に食わないんだ」と激昂した。

俺は、何も言えなかった。たしかにこいつの言う通りだったすると迅が突然

「俺の計画にしばらく協力しろ今からお前は、俺の部下で大佐で副官だ文句は、受け付けない」

なんと俺は、急に大佐になったようだししょうがないこいつを少し手伝ってやるか俺は、「いいぜやってやるよ

何を手伝えばいい？」と答えた迅は、とたんに笑顔になった俺は、知らなかったここから先今までの日常が

手に入らなくなってしまうとは、……………

今思えば、引き返す最後のチャンスだったのかもしれないことでの
選択が最後にあんな結果を

招いたのだろうか今でも分からないただ力の無かった俺や強さの意
味を間違えた迅が、間違えた結果だったのだろうか？

日常？（後書き）

楽しんでもらえたら幸いです。

動き出す(前書き)

読みにくくてごめんなさい。

それと車とか出てきますが技術は、発達しているけど服は、昔戦争も昔っぽい感じでいきます。ミサイルとかは、環境汚染になるので使わない事になっています。

動き出す

「で、結局俺は、どうすればいいんだ迅？」親やこいつの言いなりになるようでムカつくがしょうがないだろう、

どっちにしる軍には、火月家の当主として入らなければいけないのだ、遅いか早いかの問題だろう結果的に

いきなり大佐として入れるのだし、良いこと尽くめだ。だが、総じてこつゆづ旨い話には裏があるだがいいだろう

乗ってやるうじやないかこれでも、伝説とまで言われたのだ怖い事などないそれに、こいつを守るには、

近くにいる方がいいんだこいつのために強くなったのだからなにも問題は、無いだろう・・・

「ああ、お前には、副官として俺を補佐してもらおうそのためにまず、お前の軍人としての準備がいるだろう

それは、俺がやっておこう授業もちゃんと受けるしな学校にも何時もどつり通うことになるたまにさぼってもらおう

だろうが、それぐらいだ」と迅は、言った。他には、放課後は、ちよつと付き合ってもらおうとかそんなことを言っていた

午後の実技の授業が始まったテストの上位十位以内は、特別待遇で授業の内容も異なってくる普通の授業は、

前に出現するのを撃ちぬくだけだが特別授業は、四角い二十立方くらい部屋のどこからともなく飛んでくる

クレーを撃ち落とす使う銃も普通は、学校で用意した物を使うが、特別授業は、自分の魔銃を使っていい事になっている

魔銃は、魔法具の一つで、魔銃士が使用するものだ。魔法具は、魔

法使いが、一人一人のその魔力の形を見てから

その魔力に合う物をつくる、作る事に特化した魔法使い（一般的に作魔師と呼ばれる）が、作りだす。作りだす魔法使いが、優秀なほどいい形代が出来るそれに本人が魔力を注ぎ込み完成するだから形代が良ければいいというものでもない

魔法具が出来た時、必然的にどんな魔法使いになるか分かるわけなので魔法具が銃ならば、銃の練習をすればいいとゆうことである
火月家は、軍人家業だけで、稼いでいるわけでは、無いそれが、だれでも使える授業用の物を作ったり普通の魔法具の

製造販売で莫大な財産をもっている俺は、魔力の形が特殊なので、四つの魔法具ができてしまった。その中の二つの

魔銃を使っている。そう、二丁拳銃であるこれは、射撃科でもだいぶめずらしいというよりいらない迅曰く猫被ってるおれは、

困ったりもした注目されたくないのだめんどいからでもまあしょうがないこれでやるしかないのだから・・・

魔銃の名前は、右に持つてる黒に銃身の先に白の龍の装飾の物が黒龍頭りゅうとう、左に持っているのが、さっきの真逆の装飾の物で

白龍頭びやくとう と言う。両親が言うには、火月の最高傑作の二つらしい・・・
・まあ、それは、置いといて俺の番らしい

箱の中に入った俺は、最高難易度のもを設定しているため中は、真っ暗だ、頼りになるのは、聴覚と、気配だけだ

すると、右斜め上五メートルあたりからクレーの機械のわずかな音がしたすぐにそれに向け銃撃魔法ダークネスを

黒龍頭で放ち次のクレーを銃撃魔法白光を白龍頭で打ち抜く次に六枚同時にクレーが放たれるそれを早撃ちの要領でダークネスと白光で同時に撃ち落とすしばらくそんなのが続いた。結果は、パーフェクトこれが出るのは、黒と俺だけである

外に出ると黒が「さすがだな龍は、」と労ってきたありがたく受け取っておく「黒だつてできるだろ」といってやると

黒は、「お前は、息も上がっていないじゃないか」と少し悔しそう

に言っていた俺は、「実際すごい疲れたさ顔に出ないだけだ」と言っておくすると黒が、「すぐに抜いてやるさ、待ってる」と言ったので素直に頷いておく
そんなこんなで授業が、終わり放課後になった。

約束通り迅の待つ場所に行った

だがどこを見渡しても迅の姿が見えないあいつが時間に遅れることは、まず無いので場所を間違えたかと思った

だが、通り近くのリムジンから迅が下りてきた手招きしているのであいつの所に行くのと車に乗り込んでしまった

どうやら乗れということらしい乗るとこれ本当にリムジンかと疑いたくなるほど速かった聞くとこれは、軍で改造した物らしいもつと違うことに技術使えよとあきれってしまった軍も馬鹿の集まりか？

そんな事で気を取られている俺もやはり馬鹿なのだろうどこに行くか、聞かなかつたのだからまったく自分が恥ずかしくなる

聞こうとした時、ちょうど着いたらしいまったたくここは、どこだと降りながら観察したがそれのおかげでここがどこか分かった

ここは、軍の支部だと予想を立てたどうやらそうらしいし、こここのボスは、どうやら迅らしいおお、さすがは、少将だなあとも思った我ながら、のんきなもんだ何をするのだろうか？とりあえず聞いてみよう。

「ここでいったいなにすんだ？」すると「ああ、お前の書類の作成とか任命式みたいな事をするんだ」と笑顔で言ってきた

「ほー」とだけしか答えない俺は、どこか抜けてるのかもかもしれないまあ、めんどい書類とか書いたあとなんか勲章みたいなのもらったこれが大佐の証に成るようだ結構かつこよくてびっくりした

服も軍服をもらったが、大佐からは、どんな服を着てもいいらしいこれは、ラッキーだった三四年前の傭兵時代の物と同じ様な物を作ってもらったことにした。

あれは、結構気に入っていたからよかった。しばらく内部を案内してもらった結構すごいな軍もどうやら馬鹿じゃないみたいだった俺が言えた義理じゃないがね。

しばらくすると変なおっさんに因縁つけられたこの人めっちゃ体格いいなーと驚いているとおっさんがなんか言ってきた無駄に偉そうだった

理由は、このおっさんも、少将で、迅と仲が悪いみたいだったまあ、あんな出世街道まっしぐらなんだし恨まれて当然かなと考えると迅の馬鹿がこのこ歩いてきやがったこいつお前の悪口めっちゃ言ってるよーいいの？でも助かったかなーと思ってるとおっさんが迅に「迅少将感心しませんよこんな馬鹿みたいなガキを連れて来てあげく大佐にするとは、気でも狂いましたかな？」と嫌みたっぷりに言った

迅は、「お言葉ですがこいつは、馬鹿ですが伝説とまで言われたあの龍騎士ですよ気がくるってるのは、あなたじゃないんですか？クラスト少将」と反撃したクラストのおっさんは、キレタ顔で「ほう、伝説と言ってもたかが子供の傭兵では、ないですかやはり私は、

わからんですね。」と言っていた迅は、ほんとに余計な事を言った「では、戦場で数々の功績をあげたクラフト少将みずからためせばいいのでは、」

おっさんめっちゃ怒ってますけど、どうゆうことねー。ややこしくすな馬鹿もうなんかそんなこんなで試合することになった

はーめんどこんな雑魚相手にしなきゃいけないとかそーいや英雄の野郎の記憶にこんな様な記憶会った気がするあんたも苦労したねーとか思う

はーほんとに伝説になった時より強くなったというのにどやって加

滅しようか殺したらまずいしなどうしよう迅の事だから刀でやんな
きゃキレるし

しょうがない一瞬で終わらせるかワープの魔法を使い家に在る俺の
もう二つの魔法具こくりゅうが 黒龍牙と はくりゅうが 白龍牙 を出す二刀流である装
飾は、黒龍頭などと同じで、実は、この魔刀も魔銃も

隠してある能力があるがまだ秘密ださてかたずけるかねえ・・・
勝負にもならなかった結果は、俺が一瞬で間合いを詰めて刀を突き
付けおっさんが、負けを認めた
とにかくこんなつまらない勝負は、初めてだったので逆に記憶に残
った。

後日おっさん軍をやめたらしいなんか俺悪くないのに罪悪感あるの
なんでだ・・・

動き出す(後書き)

これからも宜しく願います

次は、戦争回になります次にラブコメ回をやりたいとおもいます。

任務（前書き）

どうなるにやら・・・

任務

そんなこんなで、土日の休日を迎えた俺は、両親とは、不仲だが、土日は、実家に帰るようにしている。行く道の広場には、太古の世界で世界を手に入れた

王様のロバート・アルセウス・ロイドとその右腕として、活躍し、戦場の霸王とまで言われたアルバート・ロング・ハートの銅像が飾られているこの二人は、

どの国でも慕われ神様扱いらしい俺の英雄の記憶からするとロバートは、喜びそうだったが、アルバートは、絶対に嫌がったと思われる。

広場を抜けてしばらくすると火月家の屋敷が見えてきたまったく憂鬱だ、俺がこんなにも嫌がりながらも帰るのは、ある理由があった敷地に入ると

その理由の主の一つが、体当たりしてきたがそれをなんなく受け止めるとその姿がとても嬉しそうにしている。それは、一匹の最強の魔獣ドラゴンだ。

しかも、統率個体の証の普通のドラゴンと違う色をしている。これは、ドラゴンの中でも特別に能力の高いものの証だったが、このドラゴンは、

とても小さい。理由は、簡単で、こいつがまだ赤ん坊だからである。こいつは、俺の相棒のアルトの子供だアルトも統率个体だが、他のドラゴンを

統率する気は、無いだが、アルトは、統率个体の中でも特別らしく普通は、そんなことは、無いアルトの能力は、統率个体率いるドラゴンの群れ一つと同じくらいらしい

どんだけだよ・・・さっそくアルトの子供のテノールと一緒にアルトのもとに向かうアルトは、庭の真ん中で堂々としているアルトの体の色は、

真っ白で、いつ見ても綺麗である普通は、黒らしい、テノールは、青だ。アルトに、声をかける。

「よう、アルトいつもお前は、綺麗だな」と褒めるとアルトは、嬉しそうに頭をこちらに寄せてきた俺は、その頭をなでながら

「実は、俺軍に、入る事になったんだけどどうする？」と聞くとアルトは、嬉しそうにももちろん一緒に行くぜと言うように

「ガアアアア」と吠えた。こいつの場合ただ暴れたいんだろっかな？と思う俺が、家に帰る理由は、こいつらに、会うためであるあのマンシヨンじゃ

さすがに住めないだから、家に帰るしかない。両親は、こいつらの事は、喜んで世話を妬いている火月の家にとってドラゴンは、神のような存在だ、

俺がこいつを連れて帰った時あの親が、俺を褒めたほどだった・・・

そろそろこの世界について、教えようと思うこの世界は、五つの大
国
アイルト公国・サイファル皇国・ヴォルイラ興国
ゼンヴィス共和国・ヨイツ王国といくつかの小国で出来ている今は、
停戦中だが、二年前まで、どの国も戦争中だった。いつまた始まる
かも分からない。

俺は、その中で、傭兵として戦ったまあ、訓練としてしか、考えて
いなかった・・・技術は、進歩している車があるくらいだが・・・
格差社会でもある階級は、皇族・貴族・上民・平民・下民・奴隷だ。
俺は、貴族だ、火月家は、結構階級も高い家らしい俺がいるのは、

サイファル皇国だ。

この世界は、魔獣も存在している。戦争には、ある程度ルールがある。その一化学兵器を使用しないその二魔法協会は、完全に中立であることその三

街で、虐殺を行わないなどがある。破るとどの国でも連合を作り討伐に向かう。魔法の形態は、火・水・土・風・木・雷がある。俺の使う魔法は、

光・闇で特別な魔法だ、ただでさえ魔法使いが少ないのに無駄に難度が高いので、ほとんどいない俺は、この魔法しか生まれつき使えなかった

他の魔法も使いたいのに残念でならないまあ、ここは、そんな世界だ。

土日を実トたちの軍への引越しに費やしたそこで、色々ひと悶着あつたが結果的に引越しは、成功した。

今日は、学校をサボつての任務だった。そう、俺の軍人としての初任務である内容は、要人の護衛らしいなんか、期待してたのと違うが、

しようがないかもしれない。アルトたちには、お留守番してもらおうとしたが、テノールが、ぐずるので、テノールだけ連れていくこいつは、

並みの戦士や魔法使いより強いので、守ってあげる必要がないので安心だそれより護衛する相手って誰なのだろう？

すると、迅が、一人の女性を連れて来たこの人を護衛するらしい迅まで来るのだからよほど偉い人なのだろうか？とりあえず近くに行つて

挨拶に行く

「こんにちは、護衛をさせてもらう火月龍騎です。」と言ったところで俺の体が止まったその女性が結構な美人さんだった美人さんは、ロングの茶髪に琥珀色の目をしていて愛らしい顔立ちだった。この時俺のテンションは、めっちゃ上がっただってムサイおっさんじゃなくて

こんな美人なのだこれでテンション上げないやつは、男じゃないと思うのだが迅速は、男じゃないという事にしようこいつの事だ

かっこいい面してるから耐性があるのだろうむかつく任務の隙を見て殺そう、うん、そうしようと思っているとその女性は、驚いた顔で俺の頭上を見ていたなんだろう？・・・ああテノールのことかな？しばらくして女性が

「失礼しました。私は、ジヨウ・タウロス・ヒジンです。それは、統率個体のドラゴンですよね？」とおそろおそろテノールを指差して聞いてきた

「はい、そうですよ」と俺は、頭に乗っているテノールを胸に抱いて答えた。テノールは、首を曲げ俺に向かって「くう」と鳴いた。畜生かわいいぞこんちくしょうと思いつつ頭をなでるぶつちやけテノールは、愛玩ペット並みにかわいいと思うこれが、アルトみたいに

「ぐがああああ」とか言うと思うと成長すんなど思いたくなる。ヒジンさんは、触ろうと手を伸ばしているテノールが「きゅう？」と鳴きながら

首をかしげると我慢の限界だったようで撫でながら「かわいい、かわいいよおおおお」と言っている大丈夫かなこの人？

しばらくして落ち着いたようだった名残惜しそうなヒジンさんを車に乗せながら護衛の任務に就く護衛は、俺の部下でもある迅の部隊の精鋭で

行うことになるさすがに強そうなのが何人もいた護衛は、アイルト公国に交渉に行くのの護衛らしいテノールは、ヒジンさんと迅と遊んでいる

そっぴや迅ってかわいいの好きだったよな？と思いだしたりして交渉の帰り道謎の大部隊に囲まれた・・・

相手の目的は、ヒジンさんらしい。俺は、黒龍頭と白龍頭を構えたこれが戦争の始まりだとも知らずに・・・

先に動いたのは、迅だった迅は、身の丈よりでかい大剣、魔法具ブルータイガーを使い風高難度魔法ソニック・クロスと同時に敵を袈裟切りにする俺は、広範囲闇魔法ブラックデイ・インパクトを放ち敵を血まみれにしていく敵は、なかなか人数がいて何人かで放つ事が出来る

強力魔法レッド・エンドをヒジンさんに向けてはなった赤いビームのような光がヒジンさんに向かっていく俺は、黒龍牙と白龍牙を出して

戦争中に使った闇と光魔法合わせた魔法ワールドエンドを放ったワールドエンドは、世界の事柄をそのまま変換する魔法でなにかを無かった事にもあった事にもできる魔法だ俺は、レッド・エンドとこの部隊の存在を世界から消し去った。

急な事でみんな驚いていた。ヒジンさんは、地面にへたりこんでいる俺は、封印の解除を忘れていたのでさっきの魔法でだいぶ無理をしたみたいで、

腕の刻印が、光り出した急いで解除して、魔力を回復させた。迅が、

「今のは、龍お前か？」

「ああそうだよあと一歩遅れたらアウトだったな」

「ありがとうございます。龍騎さん」と頬を染めて言うヒジンさんどうしたのだろう？

「それにしてもいったい何なんだあいつらは、」

「ああ、あいつらは、姫様を狙った他国の部隊だろう分かるのも時間の問題だな、これで、戦争にならなければいいが」

「ちょっと待って迅今姫様って言ったお前？」

「ああそうだが、知らなかったのか名前で気付かなかったのか？」
やはり俺は、馬鹿なのだろう。ヒジンさんが、

「あの魔法は、なんですか？」と聞いてきたので説明する。いやーほんとは、言いたくないんだけどね、でも、姫様を無下にできないしね

するとヒジンさんは、尊敬したような眼差しで見て来たのでちょっと居ずらかった。テノールは、疲れたのか寝ているやっぱかわいい

後日ヨイツ王国との戦争の宣言がされた……

任務（後書き）

ラブリコメ回できたらやります。

そんな馬鹿な（前書き）

現実には、こんな都合よくないけどね

そんな馬鹿な

目が覚めた時すでに、夜中になっていた。俺は、だるい体を起した。ワールド・エンドは、とんでもない力を持っている魔法だ当然代償があるだから、俺は、

よほどの事にならないと使わない。代償は、体の一部が、別の物に代わる事だ今回は、右目だったらしい右目の色が、灰色から、燃えるような赤に変わっていた

それにともない、体は、激しい痛みを受けるこの痛みは、常人ならショック死するほどのものだったりするこの痛みに、耐えていたので、寝たのが朝だったのだ

昼あたりに戦争の宣言があったらしい・・・この赤い眼は、魔眼だったらしいどうやら、悪魔の目が変わったみたいだこの魔眼は、形からすると地獄の業火の

一つあらゆる魔を滅する焰サタンの嘆きを放つ嘆きの魔眼みたいだ痛みをとまったが便利な力を手に入れたみたいだったこれで前のような時でもワールド・エンド

を使わないで済むみたいだ。戦争が始まるということは、学校も必然的に休校になり生徒も戦争に参加する事になるだろう皆生き残れるだろうか？

とりあえず、俺は、髪を切る事にする。このままだと魔眼の発動に邪魔だからだ。髪を切ってさっぱりしたら軍の宿舎から出て実家に向かう。理由は、魔法協会の

最年少理事である姉が帰って来てるだろうからだ。姉は、戦争に参加できないし協会の仕事も免除されるので帰って来てるだろうと思つた。行き掛けにテノールを連れていく

痛みに耐えている間英雄の魂が話しかけてきて体に乗っ取られそうになった。一般的には、知られていないが、高位の英雄の転生者は、乗っ取られる事があるらしい

乗っ取られてもしばらくすると元に戻るがあまり気分のいいものじゃない。

家の中に入るとテノールが、飛んで行ってしまった。理由は、簡単で、入ってくるなり俺に、抱きついてきた赤い髪のポニーテイルの美人が苦手だからである

この人は、残念な事に姉である。これが、かわいい異性なら良かったのにな。姉の名前は、火月琴音ひつきことね若干俺の事を大事にし過ぎている。

「琴音姉さんやめてよ」ジト目で言う

「やだよ。久しぶりに龍ちゃんに会ったんだからね。．．．あれ目どろしたの？まさかワールド・エンド使ったんじゃないでしょうね。あれほと言ったのに」

「や、やだな。使うわけじゃないでしょ。．．．ごめんなさい使いました。姉に逆らえない俺である。自分が情けない。．．．」

「しょうがないわね。どうせ誰かのために使ったんでしょ。でも、その眼は、嘆きの魔眼でしょ随分と便利な物に変わったみたいね」

「ああ、うん眼帯とかつけた方がいいかな？」実際気になる。．．．

「ええそうね、お姉ちゃんがいいの買ってきてあげて。それまで、麗花れいかに会ってきなさいあの子楽しみにしていたみたいだから」

「え、麗花来てんの？まじかよ俺帰るわじゃっ」

「待ちなさいあんなかわいい子があんたを待つてるのよ男ならいきなさい」

「いや、麗花は、別だよ・・・はい分かりました行きます」やはり逆らえない俺である。なんかほんと情けない・・・

「分かればよろしい。行かなかつたら殺すわよ」と脅されては、行くしかない俺である

俺の部屋に入るとそこには、一人の美少女が座っていた黒髪のロングヘアで、でるとここでてる十人が十人認める美少女だ普通だった俺は、めちやくちや

喜ぶが、この子を好きになったら反則になる気がするそれは、この子が、熱狂的なアルバート信者である事が原因だ。昔傭兵時代に戦いの神として祀られている

アルバート信仰の教会に祈りをささげるのが傭兵のならわしだったので行ってみたらそこが、麗花の家だっただが、麗花の親父さんが自分がアルバートの

転生者であると嘘を言って悪徳商法をしていたので、あんた違うだろうと見破り審罰を下してやった何故見破れたかと言うと俺が、本物だからだ

アルバートの記憶があるのだから麗花の親父さんじゃないと分かるわけだ（もちろんそうだとはい、言わなかった）あの英雄は、自分を語って悪さをする部下を処刑するほど

自分の偽物などが嫌いだった。アルバートが、心の中で五月蠅いので審罰をくれてやったわけだ麗花は、ほんとに父親を信じていたみたいで、父を軽蔑しても、

愛していたみたいで、自分が、俺の奴隷にも何にでもなるので見逃してくれと言ってきて俺は、

「奴隷にもならなくてもいいよ反省してくれればと」見逃しても、親父さんと一緒にいたくないというので姉さんに預けたのである。

麗花は、俺がアルバートの転生者とは、知らないが、父の悪事を暴いてくれ見逃してなにも請求しないのに恩を感じてくれていたらしい頼めば何でもしてくれると思う

これで、好きになってつきあってくれると思うでもそれじゃ無理ありだそんなのは、フェアじゃないと思う。だからそんなことを言わないようにしたいので

会いたくないのである麗花は、姉さんの下で秘書をしている姉さん曰くむちゃむちゃ優秀らしいすると麗花が、

「龍騎様お久しぶりです。・・・その目は、どうしたんですか？」と笑顔で言った惚れたらどうすんだこの野郎

「ああ、久しぶりこれは、何でもないから」と答える

「そうですね？今日は、龍騎様に、言いたい事があってきました。」と決意したみたいに言うそんな顔も可愛いおっと危ない危ない惚れるところだった

「で、何を言いに来たんだい？」

「はい、実は、私琴音さんの書類を整理している時に、こんなものを見つけてしまいました」と申し上げなさそうに言う。そこには、俺の秘密が記されていた

「これ、見ちゃったの？」と意味のない事を聞いた

「はい、すみません。そして改めて父の件は、すみませんでした。まさか、アルバート様のほんとの転生者様だったとは、」

「あはははは、ばれちゃったどうすんのこれ？」やばいやばい一番ばれちゃいけない子にばれたようすんだよ姉さんと焦った

「ほんとは、戦争で、戦死してしまうかもと思って、こ、告白しようと思ってきたんですけど」とうれい事を言ってくれるでも、

「それって俺が、転生者だからでしょ」と素直に喜べず余計な事を言ってしまう

「違いますその前から好きでした。転生者かどうかなんて関係ありません。実際たしかにアルバート様の熱狂的な信者ですが、好きな人がアルバート様では、

ありません。そんな会えるかも分からない人を好きになんてなれません」たしかに一理あるが、試す方法がない

「そんなの、確かめる方法なんてないじゃないか」と言ってしまうあーあ言わなきゃいいのに俺の口

「でも・・・ほんとなんです。信じて下さい。」えーでも怪しいな〜泣きそうな顔で言われても俺が、困るだけだからすると、

「その話ほんとよ、それよりはいい、龍騎眼帯付けてあげるね」と姉さんが来たちよつとそれどころじゃないんですけど、眼帯は、焰の刺繍がしてあり意外と似合っていた

「分かった信じるよ答えだけどめっちゃうれしいよ俺でよかったら」と答えると麗花は、泣いて喜んでいたおおこれって初めての事だからうれしいさ倍増だぜ

俺に恋人が出来た記念すべき日だったやっただぜこれで俺もリア充だと喜んでたら壁にぶつかったやっば馬鹿だったリア充になっても馬鹿は、治らないらしい……

そんな馬鹿な（後書き）

どうしようか？

開戦（前書き）

がんばろう

開戦

翌日朝早くに軍の宿舎に戻るときたまたま、迅の部屋の前を通ったら、服を少し着崩した美少女が出てきた周りを気にしている風だったので隠れて見ている事にした。

たしか、あれは、元帥のお孫さんだった気がするもしや、やつは、昨晚おたのしみだったのか！今度確かめてみるかなあそんな時は、色々教わらなくては、ふふ、いかん

だめだこんなこと考えちゃ惚気ちやいかんぞ俺まあ、たぶん、戦争でそれどころじゃないと思うし・・・

それと同時に俺は、あいつたしかあんだけ妬まれても元帥と仲がいから、面と向かって嫌がらせは、されないつて言ってたな、なるほどこういう事が

確かに元帥がかわいがるわけだ。なるほどねえまあそこも後で聞くな

昏過ぎくらい迅の部屋に呼び出された。何だろうと思っていると迅が、

「お前には、特殊部隊を指揮してもらおう部隊の役は、少数精鋭の奇襲攻撃と相手国の要人の暗殺・拉致・情報収集だ。」ほう、面白そうだ傭兵の時は、戦場が、主だったしな

「奇襲って派手にやっているのか？それだったら喜んで」俺は、戦場では、目立ちたがりになる普段と真逆だ。どうなってるんだ俺の人格・・・

「ああ、そのほうがいい相手の注意をそらしたいしな形勢がガラツと変わる可能性があるももちろん俺たちに有利にな」んゝ結構重要かも・・・

「オツケイいぜやってやるよ」なんかおもしろそうだしな。メンバーってどうなんだろう？

「メンバーは、お前以外に、五人だ全員優秀だ」ほう、ますます期待しちゃうねどんな人かなおもろい奴ならいいんだがなゝ

「実は、待してあるんだ、おい、入れ」だれかなゝドキドキしちゃうね

「失礼します。」入ってきたのは、俺のよく知る人物だった驚いたがこの状況ならと、予想していた事態でもあった。おお、予想的中さすが俺そう入ってきたのは、

「右から順に黒川比例少尉・青沢雄二中尉・加賀見^{かがみしん}芯少佐・時原^{ときはらしゅん}瞬大尉・大谷^{おおたにほむら}焔少尉です。」と迅の秘書が言った。そう黒と青がいたのだ。二人は、事前に迅の事も俺

の事も知らされていたのだろうたいして驚いていない。たぶん迅が軍に入ったばかりのこいつらを

入れたのだろう知ってるやつのほうがいいという事だろう他の奴も名前は、聞いた事がある爆撃の芯・時の守護者、瞬・大罪の炎、焔という二つ名で呼ばれ恐れられてる

やつらだった気がする。なんかカオスだなまあ、いいか皆おもしろそうだしね。ここは、軍人らしくしとくかなあと思った。

「俺が隊長になる。龍騎大佐だ、これからよろしく頼む」と言っておいたすると、皆敬礼してきたので、こちらも返しておくが、

「君たちには、さつそく敵基地の奇襲任務をやってもらおう皆頼んだぞ任務開始は、今から一カ月後だそれまでチーム訓練をおこたるなよ」と言った。

五人とも敬礼して、退室していった俺は、残って作戦の内容と、訓練の事、今朝の事を聞いた。やはり今朝の件は、おたのしみだったらしい……

一カ月がたつたいよいよ開戦だ部隊メンバーは、この一カ月の訓練でよくまとまったさすが、優秀なやつを集めただけあった作戦内容は、ヨイツ王国の後衛にいる

作戦本部に襲撃する普通だったらできないが瞬の魔法タイム・ワープで、陣営に直行できるのでだ奇襲は、俺が、おとり役で、敵陣営の本部でアルトを使いながら

暴れるその間に他の五人で、陣営の大将ハイド中将の首を狩る

「皆、準備は、いいか」

「大丈夫ですよ隊長、隊長の方こそあの中に入って乱戦すんでしょ大丈夫つすかいくらアルト君がいるからって無茶つすよ」馬鹿にすんなちよつと不安だぜ

「全然平気だぜお前らこそミスんなよ」あゝ不安だワールド・エント使いたくないし頑張らないとな

「何言つてんだよ俺らの実力知ってしょ隊長さん」青がからかった感じに言う

「ああじゃあ作戦開始だ。瞬頼む」やってやるしかない俺は、決意を硬め黒龍牙、白龍牙を握った

「じゃあ行きますよアルト君、隊長俺らも頃合いになったら作戦に行きます。なるべくかくらんさせてくださいね。」もちろん。やるからには、最善をだ。

瞬が、ルーンを唱える「時を短縮しろ、タイム・ワープ」俺は、敵陣の真ん中に飛ばされた……

突如陣営の真ん中に現れた龍と人に敵は、驚いた「な、な、なんだ、何故龍がこんなところにしかも、統率个体じゃないか」と恐怖する

「アルト暴れようぜ」

「ガアアアア」アルトが答えとして吠えた俺も、魔法具の秘密にしていた力を解放するために、ルーンを唱える

「龍が泣き叫び、こだまする悲鳴その全てを救い助ける神龍の牙よ今姿を見せる」黒龍牙と白龍牙が光り輝き一つになる。そして、灰色の柄に灰色の鏢
灰色の刀身に黒の上り龍、白の下り龍の装飾の刀が現れるそれを掴み刀の名前を言う

「龍神刀・無双龍牙」無双龍牙が、灰色に光り出す無双龍牙だから使える俺の剣術と魔法が融合した魔剣術を放つ

「デュランダル」いくつもの衝撃波とともに黒と白の氷の槍が下から生え半径十メートルで、血飛沫をまき散らす。断末魔の悲鳴がいくつも聞こえる

内臓が飛び出たりと、俺の周りは、一瞬で地獄絵図に変わった俺は、それを気にもとねずに、さらに、魔剣術を放つために、地面を突き刺す

「パンドラ」半径五百メートルの地面が闇色に染まり人が沈んでいく、敵兵は、叫びながら沈んでいく、その時、俺に魔法が殺到した俺は、眼帯を外し手に入れた

魔眼を使った。途端に魔法が黒い炎に包まれ消えた敵陣営の兵士の顔に絶望の表情が浮かんだその時アルトが、俺を忘れんじゃねえとでも言うように

白い炎のプレスで、敵兵を炭に変えていった。囷には、これぐらいで十分か後は、アルトの好きにさせるかな……

「もつにげらんねえぜ、大将さん大人しく消えろ」

「くそ、だが我が最高の防御魔法プラテネスを破ってから言うんだな若者よ」

「ち、こうなったら一斉攻撃行くぞ、爆水よ敵を滅ぼせ激流」

「雷よ下の物に裁きをセント・ライトニング」

「衝撃よ我が手に爆衝刃」

「時は、崩れたタイム・ブラッド」

「汝は、大罪が一つ強欲その炎をもって焼き尽せグリッド・ブレイ

ズ

いくつかの巨大な魔法が、ハイド中將を消し去ったこの時、一回目の戦いの終わりを迎えたのだった……

開戦（後書き）

まだまだ戦争は、終わりません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0883z/>

僕らは、ただ強くありたかった。

2011年12月9日01時57分発行